

目 次

1 主題について	1
2 授業研究	4
【授業研究 1 小学校「A表現 音楽づくり」】	5
小学校第4学年「生き物のようすをあらわす音楽をつくろう」における 知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てる音楽づくりの指導 －コンピュータを活用した活動と互いの作品のよさや面白さを伝え合う 活動を通して－	
【授業研究 2 中学校「A表現 歌唱」】	13
中学校第3学年「混声合唱の響きを味わおう」における知覚・感受した ことを基に思考・判断する力を育てる歌唱指導 －テクスチャを窓口にして表現の工夫をしたことを伝え合う活動を通 して－	
【授業研究 3 中学校「B鑑賞」】	21
中学校第1学年「箏に親しもう」における知覚・感受したことを基に思 考・判断する力を育てる鑑賞指導 －唱歌（しょうが）をつくる活動と感じ取って聴いたことを伝え合う活 動を取り入れた学習活動の工夫を通して－	
3 研究のまとめ	29

音楽科研究主題

知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てる音楽科学習指導 ー〔共通事項〕を生かした言葉の重視と体験の充実を通してー

1 主題について

(1) 「知覚・感受」と〔共通事項〕とのかかわりについて

小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年8月 文部科学省）及び中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年9月 文部科学省）（以下、中学校解説と示す。）に示されている、表現及び鑑賞のすべての活動において共通に指導する内容である〔共通事項〕を、以下のようにまとめた。

小学校〔共通事項〕

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)及び(イ)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。

(ア) 音楽を特徴付けている要素

(イ) 音楽の仕組み

イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。

中学校〔共通事項〕

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ること。

イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解すること。

知覚：聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識すること。

感受：音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れること。（中学校解説より）

中学校解説では、「本来、知覚と感受は一体的な関係にあると言えるが、指導に当たっては、音楽を形づくっている要素のうちどのような要素を知覚したのかということと、その要素の働きによってどのような特質や雰囲気を感じ取ったのかということ、それぞれ確認しながら結び付けていくことが重要となる。」と示されている。

また、音楽科の学習においては、「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連に着目し、それを窓口として音や音楽の一刻一刻を知覚し、それらの働きが生み出す特

質や雰囲気を感じること」に大切な意味があり、さらに、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じすることは、すべての音楽活動を支える最も基礎的な能力」と述べられている。知識としての〔共通事項〕は、音楽のよさや面白さを生み出す働きをもっており、これらの知識を知覚し感受することと分離させて指導しても、〔共通事項〕を習得したことにはならない。

これらのことから、「この知識は自分の役に立つ。」というように、子どもが〔共通事項〕を習得する必要性を感じられ、子どもが音楽のよさや面白さを知覚・感受できるように、教師が授業を仕組むことが重要だととらえる。

(2) 音楽科における「思考・判断」について

中学校解説には、「歌唱については、例えば『歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと』（第1学年「A表現」(1)のア）と示し、①感じ取る対象（＝『歌詞の内容や曲想』）、②思考・判断（＝『表現を工夫して』）、③歌唱による表現（＝『歌うこと』）の三つの視点で構成した。このような各事項における構成の考え方は、歌唱の他の事項や、器楽、創作、鑑賞の各事項においても同様とし、それぞれの学習の特質に応じて示した。」と示されている。さらに、今回の改訂では、「各事項を上記のように構成することによって、指導のねらいを一層明確にし、生徒が感性を働かせて感じ取ったことを基に、思考・判断し表現する一連の過程を大切にしたい学習の充実を求めている。言い換えれば、音楽科の特性に即した思考力、判断力、表現力などを育成する指導を行い、音楽科のねらいを真に実現する教育を進めていくことを目指しているのである。」と示されている。

これらのことから、知覚・感受したことを基に児童生徒が思いや意図をもって表現を工夫したり、味わって聴き取ったりして思考・判断する主体的な活動を重視する。

(3) 研究の基本方針

児童生徒が思考・判断する学習は、従前から音楽科においても重視している。また、音楽科における評価の第二観点「音楽的な感受や表現の工夫」の趣旨は、「音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し、生かしている」ことであり、思考・判断することに他ならない。音楽科が目指す児童生徒の姿を達成するためには、この「知覚・感受したことを基に思考・判断する」学習をいかに生き生きとした活動にするかが課題であり、ここに学校教育において児童生徒が共に音楽を学ぶ意義がある。

そこで、児童生徒一人一人が、基礎的な能力である音楽を形づくっている要素を「知覚・感受すること」を身に付ける指導と、それを基にして児童生徒が思考・判断する指導を、相互にかかわらせながら補強し合うような工夫をしていくことで、音楽科の特性に即した思考・判断する力を育てることができると考える。

(4) 主題に迫るために

ア 〔共通事項〕を生かした活動

中学校解説には、「音楽を形づくっている要素は、生徒が生涯のうちに出会う多様な音楽を理解するための重要な窓口」とも示されている。

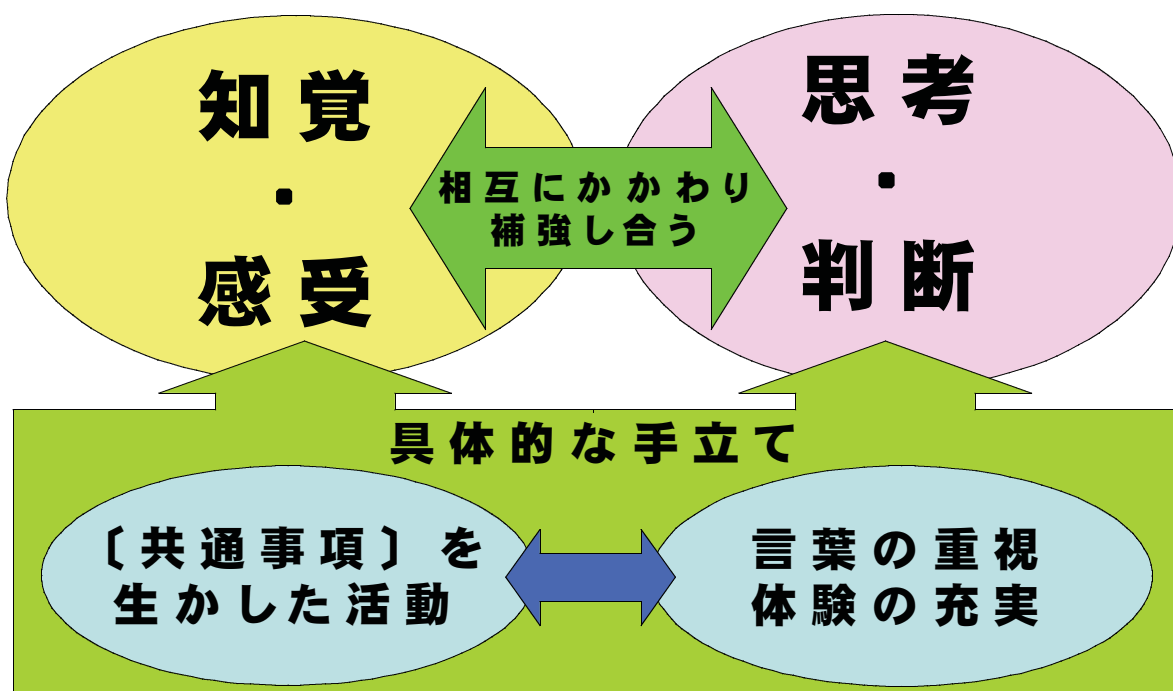
この重要な窓口である〔共通事項〕を知覚・感受し、それを基に思考・判断する指導を教師が仕組むことは、音楽科の特性に即した思考・判断する力を育てることになるとともに、音楽科の目標を実現することにもなる。さらに、授業時数の限られた音楽科の題材において〔共通事項〕を焦点化することは、児童生徒が主体的に音楽活動をしているという学びの充実感を味わうことにつながると考える。

イ 言葉の重視と体験の充実

本研究発表会講師の玉川大学准教授 高須一氏は、「音楽科における言葉の重視と体験の充実」において、子どもに十分に思考・判断させない授業では、「子どもが自ら考え自ら学び、主体的に課題に取り組み、課題を解決していくような授業にならないのは自明のこと」であり、「子どもの主体性が欠如した授業において、子どもの学びは担保されない」と述べている。これを受けて、音楽科における言葉の重要性について、「言葉はコミュニケーションの道具であるとともに思考の道具である。自分の体験を言葉として友達に伝えようとする事で自分の考えをまとめたり、自分の考えを整理したりし、自分自身を発見することができるのである。(中略)さらに、授業において集団で音楽を学ぶ意義は、クラスで意見を交換することで集団で思考することが可能となり、「学校で音楽を学ぶ意義は、まさに他者との言語活動、集団による言語活動にあるといっても過言ではない。」と述べている。そして、「体験と言葉は密接な関係」にあり、「『体験⇔言葉』という双方向性を学習過程に組み込んでいく必要がある」と、併せて述べている。

そこで、表現及び鑑賞の活動において、第二観点である「音楽的な感受や表現の工夫」をする学習の場面で、思考・判断する学習を深めるための音による体験を充実するとともに、言葉を重視した指導を工夫していく。その際には、児童生徒が〔共通事項〕を生かして、音や言葉で伝え合う学習を展開していきたい。

〈音楽科研究主題の基本的な考え方〉



2 授業研究

研究主題に関する基本的な考え方を踏まえ、〔共通事項〕を生かした言葉の重視と体験の充実を通して、知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てる手立てを講じ、小学校1校、中学校2校で授業研究を行った。

○小学校A表現 音楽づくり 「生き物のようすをあらわす音楽をつくろう」



イメージを表した計画書(左)を基に音楽をつくっている様子(右)

○中学校A表現 歌唱 「混声合唱の響きを味わおう」



テクスチャを窓口に表現を工夫したことを伝え合い(左)、表現に生かしている様子(右)

○中学校B鑑賞 「箏に親しもう」



音色に注目して唱歌(しょうが)をつくり(左)、各自の作品を紹介し合っている様子(右)

【授業研究1（小学校）】

小学校第4学年「生き物のようすをあらわす音楽をつくろう」における知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てる音楽づくりの指導
ーコンピュータを活用した活動と互いの作品のよさや面白さを伝え合う活動を通してー

1 領域 「A表現 音楽づくり」

2 題材名

「生き物のようすをあらわす音楽をつくろう」

3 題材の目標

児童一人一人がつくりたい音楽のイメージと音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みとのかかわりを知覚・感受し、思考・判断しながら思いや意図をもって音楽をつくる力を育てる。

4 焦点化する〔共通事項〕

・ア(ア) 旋律, 音色, 速度 (イ) 反復, 変化

・イ 

5 題材設定の理由

「生き物のようすをあらわす音楽をつくろう」は、自分が表現したい動物や昆虫を選んで音楽づくりをする題材である。

児童一人一人がイメージした動物や昆虫を音楽で表現するために、「旋律」や「変化」などを知覚・感受したことを基にして、コンピュータを活用して音を音楽に構成する過程において思考・判断し、まとまりのある音楽をつくるようにしたい。

児童は、動物や昆虫が大好きである。理科の学習でも観察をしているほかに、休み時間などでも動物や昆虫の絵を描いたり、本を読んだりしている。また、家庭でもペットとして育てている児童も多く、動物や昆虫は児童にとって身近な存在である。そこで、音楽づくりのモチーフに児童が好む動物や昆虫を自由に選ぶことで、児童がつくりたい音楽のイメージを広げ、そのイメージを旋律にするための材料である音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み（以下、要素や仕組みと示す。）と結び付けて音楽づくりをすることができるのではないかと考えた。併せて、どの児童も共通に理解することができる動物や昆虫をモチーフとすることにより、作品を発表し合う時にも、聴き手の児童に自分の作品の思いや意図を伝えやすいと考えた。

音楽づくりでは、「自分もつイメージを表す為に、意図をもって要素や仕組みを利用する」という活動を行う。児童が大好きな動物や昆虫を音楽で表すためには、要素や

仕組みを知覚し、そこから生まれる特質や雰囲気を感じた上で、自らのイメージを表すためにどのような要素や仕組みを使うかを考え、利用する必要がある。この作品をつくっていくという体験を通して、要素や仕組みは音楽をつくるときに役立つ知識であることを実感をもって理解させるとともに、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てたいと考えた。

6 教材

- ・「エーデルワイス」 阪田 寛夫 作詞／ロジャース 作曲／嘉手納 洋子 編曲
- ・コンピュータの無料作曲ソフトウェア
 - 「Muse」（ソフトウェア本体）
 - 「Muse Visual Editor」（音符、休符などで入力するための拡張ソフトウェア）

7 主題に迫る具体の手立て

(1) 〔共通事項〕を生かした活動

ア 既習曲と「音楽グラフ」を用いて要素や仕組みを知覚し、曲想を感じ取る活動
旋律、音色、速度、反復、変化の中から、何を使えば自分の思い描くイメージを音楽で表すことができるか、思考・判断しながら音楽をつくるための手立てを示す。

イ 思考・判断する基になる知識を習得する活動

音楽づくりの活動をする前に、譜表（ト音記号、ヘ音記号）や音符と休符をコンピュータに入力して音価（音の長さ）、音高（音の高さ）を一人一人が体験する活動などを通して、知識を習得する。

(2) 言葉の重視及び体験の充実

ア コンピュータを活用した活動（体験の充実）

音楽づくりに、コンピュータの無料作曲ソフトウェアを利用することで、児童にとっての記譜及び演奏技能の困難さを解決し、学習を効率よく進めることができる。また、児童は自由に何度でも自分のつくった音楽を聴き、イメージに合った音楽になるように試行錯誤しながらつくりたい音楽をつくる体験ができる。児童一人一人が個人で作品をつくる体験を通して、知識としての〔共通事項〕を必然性をもって使い、自分のものとして習得することができるようにするとともに、自分の力で作品が完成した充実感や満足感を得られるようにしたい。

イ 互いの作品のよさや面白さを伝え合う活動（言葉の重視）（体験⇔言葉）

(ア) 「イメージ計画書」の作成

自分が選んだ動物や昆虫の様子（場面）をイメージ計画書に言葉とイラスト、写真などで表すことで、自分が何をどんなふうに表したいかを明確にする。

(イ) 「音楽の材料表」（要素や仕組み）の提示

動物や昆虫の様子を音楽で表す手立てとして、児童に「エーデルワイス」で既習した要素や仕組みの中からどれを利用するか考えさせるために、〔共通事項〕を「音楽の材料表」として提示する。この表を参考にして、児童は自分で要素や仕組みを選びながら、表したいイメージと関連付けて言葉とイラスト、写真などで表す計画

書をつくる。この活動を通して、イメージと表現したい音楽とのかかわりを確認し、音楽をつくるための基となる知識を習得させたい。

(ウ) 作品鑑賞会の設定

音楽づくりでは、思いや意図をもって「つくる」ことを重視し、作品を自分で「表現する」ことはせず、代わりに児童がつくった音楽はコンピュータで再生して発表することとする。児童が自分の作品を発表する際には、イメージ計画書のイラスト、写真などを提示しながら、どの動物や昆虫のどんな様子を表したのか、音楽をつくるに当たってなぜその音楽の材料を選び、どのように操作したのかといった理由を、聴き手の児童にわかりやすく伝えられるように、音楽の材料表と関連させた発表原稿を基に発表させたい。一方、聴き手の児童は、それぞれの作品のよさや面白さについて、作品を発表した児童が提示した音の材料と関連させて意見を伝えるようにする。

8 授業の実践

(1) 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
歌唱			
器楽			
創作	○	○	○
鑑賞			
題材の評価規準	どのような動物や昆虫の音楽をつくるのかイメージを広げ、興味・関心をもって音楽づくりを楽しんでいる。	イメージと旋律や変化のかかわりを感じ取り、それらを生かして思いや意図をもって音楽を工夫している。	旋律や変化を生かして思いや意図をもってまとまりのある音楽をつくっている。
学習活動における具体的評価規準	①動物や昆虫の様子をイメージし、要素や仕組みと結び付けて、音を音楽に構成する活動に意欲的に取り組もうとしている。 ②作品のイメージと要素や仕組みとのかかわりを音楽と言葉で伝えることに意欲的である。	①イメージ計画書を基に旋律と音色、速度、反復、変化とをかかわらせて、コンピュータの音で試しながら、あらわしたい表現を工夫している。 ②コンピュータで音を試しながら表現を工夫したり、イメージを明確にするために言葉で表し、さらに自分の作品の工夫に生かしたりしている。	①イメージを音楽で表すために旋律と音色、速度、反復、変化とのかかわりを生かして思いや意図をもってまとまりのある音楽をつくっている。 ②互いの作品を聴き合い思いや意図、感じたことを知的に理解して理由を述べたり、自分の表現に生かしたりしている。

(2) 学習と評価の計画（7時間扱い）

次	ねらい	主な学習活動	具体的評価規準
第1次	【知覚・感受】		
(1)	○同じ旋律でも音域を変えることによって曲の雰囲気が変わることを聴き取り感じ取る。	○既習曲「エーデルワイス」の高い音域と、低い音域で演奏した旋律とを聴き比べ、感じたこととその理由を話し合う。（一斉） ○音高と音価を音符、休符記号とかかわらせ、コンピュータに入力して自由に旋律をつくって試す。（個別）	アー①
(1)	○同じ旋律でも音色、速度、反復、変化によって曲想が変わることを聴き取り感じ取る。	○「エーデルワイス」の旋律を音色、速度を変えて聴き比べる。（一斉） ○「エーデルワイス」の形式で反復と変化の音楽の仕組みを知る。（一斉） ○「エーデルワイス」の旋律を入力し、音楽の材料表を使いながら、音色、速度を自由に操作し、曲想の変化を試した上で、曲想にふさわしい音色と速度を選ぶ。（個別）	
第2次	【思考・判断】		
(1)	○動物や昆虫のモチーフから表したいイメージをもち、要素や仕組みと結び付ける面白さに気付いている。（言葉の重視）	○動物や昆虫の中から好きなものを選び、その動物や昆虫のどんな様子を音楽で表したいかイメージ計画書に言葉とイラスト、写真などで表し、音楽の材料表の中の要素や仕組みと結び付ける。（個別）	アー② イー①
(2)	○イメージ計画書を基にして、旋律と音色、速度、反復、変化とをかかわらせてコンピュータで試しながら試行錯誤して表現を工夫する。（体験の充実）	○自分が表現したいイメージを、どの要素や仕組みを操作することで曲想にふさわしい表現ができるかを考え、コンピュータの音で試して表現を工夫しながら旋律をつくる。（個別）	イー②
第3次			
(1)	○イメージを表すために要素や仕組みを使って、思いや意図をもってまとまりのある音楽をつくる。（体験⇔言葉）	○作品鑑賞会において、自分の作品について、イメージ計画書のイラスト、写真などを提示しながら音楽の材料表と関連させて言葉で説明し、コンピュータで紹介する。（一斉⇔個別）	ウー①
(1)	○互いの作品を聴き合っ て感じたことを伝え、友達の感想を自分の作品に生かす。（体験⇔言葉）	○作品鑑賞会において、作品を聴き合い、ワークシートやアドバイスカードに書き、意見を伝え合う。（一斉⇔個別）	ウー②

9 授業の分析と考察

(1) 〔共通事項〕を生かした活動

ア 既習曲と「音楽グラフ」を用いて要素や仕組みを知覚し、曲想を感受する活動について

既習曲「エーデルワイス」の旋律を音域を変えたり、音色や速度を変えたりして聴き比べ、感じ取った曲想を発表し合ったところ、児童は、要素や仕組みを意図的に操作すると、曲の雰囲気は全く違ってくることを理解できた。

また、音楽の仕組みである反復と変化については、「エーデルワイス」の二部形式(a, a', b, a')のa, a'とbの旋律が繰り返したり変化したりしていることを実際に歌いながら感じ取らせた。なお、児童が理解しやすいように、それぞれ「くりかえし」「へんか」として示し、音を音楽に構成するための手立てを示した。

さらに、音高と速度を知覚し、そのよさや面白さを感じ取るために音楽グラフを使い、グラフの縦軸を音高、横軸を速度とした。例として、すずめと象の様子を音楽で表すときにふさわしい音高と速度を考え、その理由を発表し合った。その際、象が歩く足音や体の大きさを表したい児童は、速度を遅く音を低くしたのに対して、象の鳴き声を表したい児童は、速度は遅いが音は高くするなど、同じ動物であっても何を表したいかによって、要素の操作の仕方は違ってくることに気付かせることができた。(資料1)



資料1「音楽グラフ」

イ 思考・判断する基になる知識を習得する活動について

譜表や音符・休符をコンピュータに入力して音高、音価を体験した。児童は、今まで学校や家庭においてコンピュータを使う経験が少なかった。しかし、コンピュータへの関心は大変高く、教師の説明を真剣に聞いて操作(音符・音色、速度などの入力)をすぐに覚えることができた。また、既習曲「エーデルワイス」の旋律を入力させることで、音符・休符の音高、音価を理解させながら自由に試す時間を確保した。その上で、「エーデルワイス」らしい曲想の音色、速度を選んでいく場面を設定し、ふさわしい曲想と音色、速度とのかかわりについて考えることができた。

(2) 言葉の重視と体験の充実

ア コンピュータを活用した活動について(体験の充実)

コンピュータの無料作曲ソフトウェアの利点は、だれでも簡単に自分がつくりたい音楽をつくることができ、要素や仕組みを実際に操作するので知識としての〔共通事項〕を実感を伴って理解できることである。併せて、児童を記譜と演奏技能の困難さからも解放することができる。コンピュータを使った経験のない児童でも、使い方を理解すると、自分のイメージを音楽で表そうとして、一人で旋律や音色、速度を手掛かりにしてコンピュータの音を聴きながら、主体的に表現を工夫していた。音楽に対して苦手意識をもつ児童でも、つくった作品はコンピュータが演奏してくれるので安心してイメージを広げて音楽をつくる過程を楽しみ、児童全員が自分の

力で創造的な作品をつくることができた。

イ 互いの作品のよさや面白さを伝え合う活動について（言葉の重視）（体験→言葉）

(ア) 「イメージ計画書」の作成

イメージ計画書づくりでは、自分で選んだ動物や昆虫の様子（場面）を言葉とイラスト、写真で表したことで、児童が音楽で表そうとしていることが明確になり、教師も個々の思いに応じた指導が容易になった。児童のイメージ計画書を基に、自分がつくりたい音楽にふさわしい曲想となるように要素や仕組みを操作することで、音を音楽に構成する過程を大切にしながら表現を工夫する手立てとなった。（資料2、表1）

(イ) 「音楽の材料表」の提示

イメージ計画書の作成に当たっては、音楽の材料として、要素や仕組みをまとめた表を使用した。音楽づくりの計画書を作成する前に、教師が例を挙げながら「音楽の材料表」の中から材料となる要素や仕組みを取り出して、イメージと自分がつくりたい音楽とをかかわらせて示した。その後、児童に音楽づくり計画書を作成させたところ、自主的に自分のイメージに合った音楽の材料を表から探して、計画書を作成することができた。（資料3）



資料2 「イメージ計画書」

(要素や仕組みの例を示した表)

せんりつ	音色
高い音	かたい
低い音	やわらかい
まとまり	なめらか
	はずむ
はやさ	しくみ
ゆったり	へんか
のんびり	くりかえし
速い	
だんだんと	

資料3 「音楽の材料表」

表1 「イメージ計画書」の例（曲名「くまとうさぎの遊び」）

	表したいこと	表し方	音楽の材料
はじめ	うさぎがまよいこんでくる。	高い音、ひびかず切れる音色	せんりつ 音色
	くまはびっくりする。	低い音、ゆっくりひびく音色	
なか	だんだんとくまとうさぎがなれ てくる。	高い音と低い音を交互になら す。	リズム はやさ くりかえし
	遊ぶ。	ぴよんぴよんはねるようにつく る。だんだん速くする。	
おわり	いっしょに幸せにくらす。	ゆっくりにして、くりかえす。	はやさ くりかえし

なお、コンピュータを活用した体験活動の場面では、児童は、このイメージ計画書を見ながら、試行錯誤を繰り返して創作活動を行っていた。中には自分の感じているものがイメージしていた音に近付かずに困惑している様子も見られたが、コンピュータの利点を生かして、何度でも試す活動を繰り返しながら自分のイメージする音を求めていた。また、実際にコンピュータで音を扱っていくうちに、登場する動物を増やしたり、より複雑なストーリーにしたりと、自分のイメージをさらに広げている様子も見られた。(資料4)



資料4

「計画書を見ながら活動」

(ウ) 作品鑑賞会の設定

作品鑑賞会に向けて、児童は自分の作品を紹介するための発表原稿をつくった。発表原稿では、自分のイメージを音楽で表すために、音楽の材料の何をどのように使ったかを明らかにするように指導した。自分の考えを原稿に書くことで、イメージと音楽の材料とのかかわりについて確認することができるとともに、聴き手の児童もイメージと作品に内在している曲想とのかかわりに注目して作品を鑑賞することができた。なお、作品鑑賞会では、発表者のイメージ計画書とイラスト、



資料5「作品鑑賞会」

表2 発表原稿の例 (_____ =音楽を形づくっている要素の扱い方, ~~~~~ =その理由)

わたしは「くまとうさぎの遊び」というイメージで音楽をつくりました。
はじめに、うさぎがまよいこんできたところを表すために、うさぎは小さいからせんりつを高い音にして、大きいくまたちは低い音にして、低い音のところに高い音が入ってくるように表しました。
なかは、くまたちがうさぎになれて3びきで遊ぶようすを表すため、始めとちがう感じを出したくて、高い音と低い音を交ごにだして、みんなでどすんどすんとくりかえしてはねるようすを表しました。
おわりに、3びきはなかよく、平和にくらして月日が流れるような感じを、速度のゆっくりと、くりかえしのしくみで表しました。きいてください。

わたしは、「イルカが気持ちよさそうに泳いでいる」イメージを音楽で表しました。
はじめは、泳いでいるところを表すために、せんりつを同じような高さにしてみました。きれいな落ちつく音色にしました。
なかは、せんりつの音の高さとリズムを変えて、はじめとちがった感じにして、遠くまでおでかけしているようすをだしました。
おわりは、つかれてきて家にもどるようすで、2分音ぷを使ってゆっくりな感じができるようにしました。休ふも使いました。どこで休ふをつかうかで苦労しました。

友達の作品を鑑賞した後は、イメージと作品とのかかわりを中心に感想やアドバイスを書き、アドバイスカードを発表者に渡した。児童は、受け取ったカードを読んで学習の振り返りをし、友達の意見を自分の作品に生かすために、再度コンピュータに向かって手直しをする姿も見られた。(表3、表4、表5)

表3 アドバイスカードより

- 高い音とかわいい音色のせんりつと低い音と重い感じの音色のせんりつの組み合わせが上手で、楽しそうなイメージの感じがよくできていました。
- はやすさがゆっくりしたところは、仲直りできて平和な感じがしました。

表4 アドバイスカードを読んだ感想より

- 自分の音楽をきいて、ようすがよくわかったと言う人が多くてうれしかったです。
- けんかをしているところがわかる人が多くてよかったです。
- みんなからアドバイスカードがもらえてうれしかったです。みんなにこんなによくきいてもらえたんだなと思いました。

表5 学習をふりかえって

- はじめは自分で作曲するなんて本当にできるかなと心配でした。でも、つくりはじめると音ぶを楽ふに入れていくのが楽しくなってきました。またやりたいです。
- なかが変化すると音楽がおもしろくなりました。もっと音楽をつくってみたいです。
- 最初は音で表わすことがむずかしかったです。でも、だんだんと音で表せてきたらとても楽しくなりました。作曲家の人はいろいろ考えて作曲しているんだな。

10 授業研究の成果

コンピュータを操作することのみを活動の目的にすると児童はすぐに飽きてしまう。そこで、イメージ計画書で自分がつくりたい音楽を明らかにさせるとともに、知識としての音楽の材料表を使って要素や仕組みを操作する方法を指導した。すると、どの児童も目的をもってコンピュータの音を繰り返し視聴しながら、「○○だからもっと音色を、音の高さを、速さを変えたい。」「○○だから変化をつけたい、くりかえしたい。」など、思考・判断しながら思いや意図をもって音楽づくりの活動に取り組むことができた。一人一人が音楽で表したいイメージをもって音楽で表そうと努力し、全員が作品を仕上げることができ、また音楽づくりがしたいと意欲をみせた。

ある児童が「イメージ計画書がないと曲はつくれない。」と発言したが、この児童は、楽曲は無目的な音から成るのではなく、作曲者によってイメージを表すためにどんな音楽の材料を使うべきか熟考されてつくられたものであることに気付いた。世の中はたくさんの音楽であふれており、全てが思いや意図をもってつくられたものであるということに、音楽づくりの学習を通して児童が気付くことができたことは大きな成果であった。

また、今回の学習後、鑑賞の授業を行ったところ、児童が今まであまり意識しなかった、音色、速度、旋律、反復、変化に気を付けて鑑賞する姿が見られ、要素や仕組みを知覚・感受する力が身に付いてきたことを実感した。今までは「楽しい曲。」「いい曲。」などの情意的な感想が多かったが、「低い音ばかりだから怖く感じた。」など、曲想の根拠となる要素や仕組みと結び付けて聴くことができていた。

中学校第3学年「混声合唱の響きを味わおう」における知覚・感受したことを
基に思考・判断する力を育てる歌唱指導
ーテクスチュアを窓口にして表現の工夫をしたことを伝え合う活動を通してー

1 領域 「A表現 歌唱」

2 題材名

「混声合唱の響きを味わおう」

3 題材の目標

全体の響きの中での各声部の役割を理解し、楽曲にふさわしい表現を工夫しながら、合わせて歌う技能を身に付ける。

4 焦点化する〔共通事項〕

- ・ア テクスチュア→横の関係：旋律と歌詞，強弱，速度
縦の関係：和音，音色と歌詞
- ・イ 和音，強弱記号（ *p* *mp* *mf* *f* *ff* ◀ ▶ ）
速度記号（ poco rit. piú mosso Tempo I a tempo ）
声部の役割（主旋律・対旋律・低音部など）

5 題材設定の理由

生徒は日頃から音楽を聴く習慣はあるものの，表現する経験は多くはない。そこで，音楽の授業の中で意図的に合唱を取り上げ，合わせて歌う活動を通して，表現していく上で必要となる読譜力・発声法などの技能とともに，創意工夫して表現する技能を育てていきたいと考える。さらに，A表現(1)歌唱における指導内容ウの「声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して，表現を工夫しながら合わせて歌うこと」の達成のために，テクスチュアに着目して音楽を形づくっている要素を「横の関係」と「縦の関係」に整理して指導する。響き合いを体験し，声部の役割やバランスを考えて表現できる力をはぐくんでいきたい。

生徒への事前調査によると，合唱で心掛けていることとして，「大きな声で」，「つられないように」，「正確な音程で」などを挙げている。一方，表現を工夫するための支えとなる「発声の方法」や思考・判断するポイントとなる「パートの役割を考えて」，「歌詞の内容を理解して」，「曲に表情をつけて」などを意識している生徒は少数である。

そこで，生徒が全体の響きの中での各声部の役割を理解し，楽曲にふさわしい表現を工夫するための手立てとして，〔共通事項〕のテクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」に整理して扱うことで，合わせて歌う技能を身に付けさせたい。

本題材では、全体の響きの中での声部の役割を理解し、表現の工夫をしながら合唱を完成させていく。テクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」に整理して扱い、合唱する体験活動を通して合わせて歌う技能を身に付けさせていきたい。また、各自が感じたことや表現したいことを伝え合う活動において、パートごとや全体での話合いの場面を設定し、生徒が音楽を形づくっている要素やそれらの働きを表す用語や記号、そして自分たちの言葉を使って伝え合い、表現を工夫していけるようにしていきたい。

6 教材

- ・混声四部合唱「ひとつの朝」－組曲「ひとつの朝」から－

片岡 輝 作詞／平吉 毅州 作曲

7 主題に迫る具体の手立て

(1) 〔共通事項〕を生かした活動

- テクスチュアという視点で音楽を形づくっている要素を「横の関係」と「縦の関係」に整理した提示

生徒が、知覚・感受したことを基に思考・判断しながら合わせて歌うためには、知識としての音楽を形づくっている要素やそれらの働きを表す用語や記号を理解するとともに、それらを基にして声部の役割と全体の響きとのかかわりを感じ取って表現を工夫することが重要である。生徒の「このように表現したい。」という思いは、音楽の曲想から感受される。曲想はすでに楽曲の中に内在するものであり、音楽を形づくっている要素を窓口にして表現を工夫し、互いに伝え合って一つの合唱をつくり上げていく。

今回着目するテクスチュアは、音楽の横、縦の関係だと解釈することができる。美しい布が横糸、縦糸で織られているように、「横の関係」と「縦の関係」が融合して、美しい音楽が生まれる。旋律、和音（音程）、リズムなどの要素を単独にとらえるのではなく相互にかかわらせ、テクスチュアという視点で整理し、これらに関連させて生徒に提示することで表現の工夫に生かすことができると考える。

しかし、生徒には「テクスチュア」という言葉は聞き慣れないものである。そこで、音楽を形づくっている要素を、音楽における時間的な流れを「横の関係」、音の重なり方を「縦の関係」に大きく分け、生徒にとってわかりやすい言葉に置き換えて指導することにした。これらのことを踏まえて、生徒には「横の関係」と「縦の関係」について、次のように整理して提示した。

横の関係：旋律と歌詞，リズム，強弱，速度，（旋律の方向，音のつながり，フレーズなど）

縦の関係：和音，音色と歌詞，（声部の役割，バランスなど）

(2) 言葉の重視及び体験の充実

ア テクスチャを窓口にして表現を工夫する活動（体験の充実）

(ア) 「横の関係」と「縦の関係」のまとまりを示す練習番号の活用

今まで習得してきた読譜のための知識を生かすために、授業では必ず楽譜を用いて読譜せざるを得ない状況をつくる。そのために、生徒が楽曲の構成とともにテクスチャ（「横の関係」と「縦の関係」）を理解しやすいように、楽譜に練習番号を提示する。歌唱の活動においては、歌うことそのものを体験活動ととらえ、読譜に必要な知識を駆使して、練習番号のまとまりごとに生徒が思考・判断し、主体的に課題に取り組む姿を目指す。

(イ) 「横の関係」と「縦の関係」を意識したグループ活動

合唱をするためには、生徒一人一人が自分のパート（声部）を歌えることが前提である。そこで、グループ活動において、練習番号のまとまりごとに音程とリズムを正確に習得するためのパート練習を生徒主体で進める。この活動に平行して、教師が各パートごとに、担当する声部がそれぞれの部分でどのような役割を果たしているかを意識させる指導を行う。楽曲における声部の役割は、主旋律・対旋律・低音部などとパートごとにそれぞれ異なり、しかも、楽曲の流れの中でパートが受け持つ声部の役割は一刻一刻と変化していくものである。これこそが音楽のよさや面白さといえる。教師がこの声部の役割を意識させる指導をそれぞれのパートごとに行えば、生徒は「横の関係」と「縦の関係」を知覚・感受し、それらを基にして、パートごとのグループ活動において主体的に表現を工夫することができると考える。

イ 表現の工夫をしたことを伝え合う活動（言葉の重視）（体験↔言葉）

(ア) 生徒の言葉を生かした「音のもと」（音楽を形づくっている要素）の活用

楽譜中の用語や記号のとおり演奏しただけでは、表現を工夫したことにならない。知識としての音楽を形づくっている要素やそれら働きを表す用語や記号を手掛かりにして思考・判断することが本当の意味での表現を工夫することととらえる。さらに、自分の思いや意図を仲間に伝えるには、言葉で表すことが必要である。そのときに、音楽を形づくっている要素に加えて、仲間と共有できるわかりやすい言葉を用いてコミュニケーションを図ることができれば表現に生かしやすい。そこで、本実践ではそれらの言葉を「音のもと」として提示し、音楽を形づくっている要素とともに、生徒自身の言葉を活動の中で扱っていく。

(イ) パートごとに表現を工夫し、全体で合唱しながら練り上げる活動

練習番号のまとまりごとに、各パートのグループ活動で表現の工夫をしたことを全体での話合いで伝える。表現を工夫した根拠を「音のもと」や仲間と共有できるわかりやすい言葉を用いて拡大楽譜で示しながら説明した後、全体で合唱して工夫点を試す活動を繰り返す。その際、生徒が交替で「聴き役」になり、合唱を聴いた意見や感想を述べ合って、各パートから出された表現の工夫の中から、曲想にふさわしく、自分たちが歌いたい表現を選んでいく活動をする。この全体で合唱しながら

ら練り上げる活動を通して、全体の響きの中で声部の役割を理解し、表現を工夫する力が育つと考える。

8 授業の実践

(1) 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
歌唱	○	○	○
器楽			
創作			
鑑賞			
評価規準	声部の役割と全体の響きに関心を持ち、曲にふさわしい合唱の表現をすることに意欲的である。	声部の役割と全体の響きの調和を感じ取って歌唱や合唱の表現を工夫している。	声部の役割を生かし、全体の響きに調和させて合唱表現をする技能を身に付けている。
学習活動における具体的評価規準	①テクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」にとらえた各声部の役割に関心をもっている。 ②全体の響きの中で各声部の役割に関心を持ち、合唱表現することに意欲的である。	①発声、言葉（抑揚・アクセント・リズム・語感・濁音・鼻濁音など）の表現の仕方を感じ取って歌唱表現を工夫している。 ②全体の響きの中での各声部の役割を理解し、「横の関係」と「縦の関係」を手掛かりにして、曲想にふさわしい表現を工夫している。	①発声、言葉（抑揚・アクセント・リズム・語感・濁音・鼻濁音など）の表現の仕方を生かして歌唱表現をする技能を身に付けている。 ②全体の響きの中で、「横の関係」と「縦の関係」のテクスチュアの視点を生かしながら合唱表現をする技能を身に付けている。

(2) 学習と評価の計画（7時間扱い）

次	ねらい	主な学習活動	具体的評価規準
第1次			
(1)	【知覚・感受】 ○合唱曲「ひとつの朝」の各自のパートの「横の関係」（旋律とリズム）を知覚し感じ取る。	○範唱CDから、各自のパートの「横の関係」を聴き取る。（一斉） ○パートごとに、パート練習用テープを使って、旋律とリズムを把握する。（グループ）	アー①
(1)	○楽譜中の練習番号のまとめごとに、音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号を、範唱CDを聴いたり合わせて歌ったりする活動を通して理解する。	○楽譜に練習番号を記入する。（一斉） ○楽曲中の「音のもと」を確認するために、音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号を探して楽譜にしるしをつける。（一斉） ○パートごとに、練習用テープで旋律とリズムを正確に歌う。（グループ）	
(1)	○テクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」に整理し、各声部の役割（主旋律・対旋律・低音部など）を知覚し感じ取る。	○楽譜を使ってテクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」に整理し、各声部の役割（主旋律・対旋律・低音部など）を知る。（グループ）	
第2次			
(1)	【思考・判断】 ○発声、言葉（抑揚・アクセント・リズム・語感・濁音・鼻濁音など）の表現の仕方を感じ取って歌唱表現を工夫する。	○合唱曲「ひとつの朝」の曲想にふさわしい表現を支える技能である発声、言葉（抑揚・アクセント・リズム・語感・濁音・鼻濁音など）に気を付けて歌う。（グループ）	イー① ウー①
(2)	○全体の響きの中での各声部の役割を理解し、「横の関係」と「縦の関係」を手掛かりにして、曲想にふさわしい表現を工夫する。 (体験の充実, 体験⇔言葉)	○各パートで、練習番号のまとめごとに「横の関係」と「縦の関係」を手掛かりにして、曲想にふさわしい表現を工夫しながら歌ったり、自分の考えを「音のもと」や仲間と共有できるわかりやすい言葉を用いて伝え合ったりする。(グループ)	イー②

		<ul style="list-style-type: none"> ○全体で合唱しながら練り上げる。 ・各パートで表現を工夫したことを、全体的話合いで「音のもと」や仲間と共有できるわかりやすい言葉を用いて拡大楽譜で示しながら伝える。(一斉) ・各パートの生徒が交替で「聴き役」になって合唱を聴き取り、表現を工夫した部分の意見や感想を伝える。(一斉) ・「聴き役」以外の生徒は、各パートから出された表現の工夫の方法とその理由を理解し、合唱する。(一斉) 	
第3次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ○全体の響きの中で、「横の関係」と「縦の関係」のテクスチュアの視点を生かして各声部の役割を理解し、表情豊かに合唱表現をする技能を身に付ける。(体験⇔言葉) 	<ul style="list-style-type: none"> ○練習番号のまとめりに、全体で練り上げた表現の工夫点を確認し、合わせて歌う。(一斉) ○まとめとして、録音した自分たちの合唱を聴いて、意見や感想などをワークシートに書く。(個別) ○より楽曲にふさわしい合唱表現にするために、意見や感想を伝え合う。(一斉) 	<ul style="list-style-type: none"> ア-② ウ-②

9 授業の分析と考察

(1) 〔共通事項〕を生かした活動

○ テクスチュアの視点で音楽を形づくっている要素を「横の関係」と「縦の関係」に整理して提示したことについて

今回焦点化したテクスチュアに迫るため、音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号など（「音のもと」）をカードにして、常に生徒に掲示して授業で扱った。また、教材の拡大楽譜を示しながら、どの部分がどの「音のもと」なのかを生徒とのやりとりを通して確認し、「横の関係」と「縦の関係」に分けていった。

具体的には、合唱曲「ひとつの朝」の歌の冒頭部分においては、主旋律を歌うテノールとバスは「横の関係」（旋律、歌詞）である。後から入るソプラノとアルトのハミングは「縦の関係」（声部の役割、バランス）であるとともに、「横の関係」（旋律、音程、音色）でもあることに気付かせ、整理して示した。

(2) 言葉の重視と体験の充実

ア テクスチュアを窓口にして表現を工夫する活動について（体験の充実）

(ア) 「横の関係」と「縦の関係」のまとめりを示す練習番号の活用

生徒が主体的に、音楽における時間的な流れである「横の関係」と音の重なり方である「縦の関係」を把握し、「テクスチュア」を窓口にして表現を工夫することができるように、楽譜に教師が示した練習番号を使って、音や言葉で伝え合う場面で常に共有し続けた。（表1）

表1 合唱曲「ひとつの朝」の練習番号と「横の関係」「縦の関係」

練習番号	歌詞	「横の関係」	「縦の関係」
A-1	今 目の前に ～世界が沈まないうちに	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞 ・旋律の流れ ・リズム（三連符） ・音程・強弱の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・声部の役割 ・バランス ・pの発声 ・声部の役割（掛け合い）

A-2	さあ 方舟に乗って旅立とう		・声部の役割 ・三声の響き
A-3	あのノアたちのように ～旅立とう	・旋律と歌詞 ・速度の変化	・声部の役割 ・バランス
B-1	たとえば 涙に～	・音程	・声部の役割 ・バランス
B-2	たとえば 勇気と～	・リズム（二拍三連符）	・声部の役割 ・掛け合い
B-3	たとえば 愛を～	・音程	・声部の役割 ・バランス
B-4	時には 孤独と～	・速度の変化	・fの発声 ・バランス ・声部の役割（掛け合い）
C	旅立ちは ～いくつもの出会い	・強弱 ・速度の変化	・声部の役割（掛け合い） ・バランス
D-1	今 目の前に ～船が砕けないうちに	・歌詞 ・旋律の流れ ・リズム（三連符） ・音程・強弱の変化	・バランス ・声部の役割（掛け合い）
D-2	さあ 両腕を翼に飛び立とう		・声部の役割 ・三声の響き
D-3	あの鳥たちのように ～飛び立とう	・旋律と歌詞 ・速度の変化	・声部の役割 ・バランス
D-4	（間奏）	・旋律	・ユニゾン
E-1	はばたけあしたへ まだ見ぬ大地へ	・音程	・声部の役割 ・バランス
E-2	新しい大地へ～大地へ		・声部の役割 ・バランス
F-1	生きる喜びを～	・強弱	・旋律の受け渡し ・声部の役割（掛け合い）
F-2	広がる 自由を求めて	・付点音符と旋律 ・強弱	・和音の響き（短調）
F-3	広がる 自由を求めて	・付点音符と旋律 ・強弱	・fの発声 ・和音の響き（長調）

(イ) 「横の関係」と「縦の関係」を意識したグループ活動

担当するパートが歌えるようになるために、旋律の音程と特徴的なリズムなどを中心に生徒主体でパートごとにグループ練習をした。この活動に平行して、教師は音程とリズムの習得状況を把握するために、各パートを順番に回る。難しい音程の部分は、教師がその音をハンドサインで表し、視覚で音程をとらえさせた。ある程度担当するパートが歌えるようになったところで、担当するパートがそれぞれの部分でどのような役割を果たしているかを、楽譜を用いて練習番号のまとめりごとに意識させていく。生徒が「音のもと」カードを参考にしながら、担当するパートを中心とした「横の関係」や「縦の関係」のかかわりを考えることができるように配慮した。特に、三声及び四声が和声的に進行する部分、主旋律を受け渡していく部分、掛け合いの部分など、旋律と旋律の特徴的な組み合わせについて意識的に指導することで、表現の工夫をするポイントを生徒自身の力で探していけるようにしていった。（資料1，資料2）



資料1「ハンドサインで音程を示す」



資料2「自分のパートの横と縦を考える」

イ 表現の工夫をしたことを伝え合う活動について（言葉の重視）（体験⇔言葉）

(ア) 生徒の言葉を生かした「音のもと」（音楽を形づくっている要素）の活用

本実践では、音楽を形づくっている要素やそれらの働きを表す用語や記号などを、生徒に親しみやすくするために、「音のもと」として示した。また、自分の思いや意図を伝えるには、仲間と共有できるわかりやすい言葉を用いれば、さらに合唱表現に生かされると考えた。そこで、授業で生徒が発言した「音のもと」にかかわる言葉を教師が取り上げ、「音のもと」の種類ごとに分類していき、それらの言葉を積極的に使うようにした。

具体的には、「練習番号F-2の『広がる』の和音は寂しい響きで、F-3の『広がる』の和音は明るい響き。私たちのソプラノはほとんど同じ旋律だけど、他のパートの音が変わったから全体の響きが変わった。」という生徒の意見から、「寂しい響き」、「明るい響き」、「全体の響きの変化」の言葉を「和音」の仲間に入れて、生徒の音楽に関する語いを増やしていった。（資料3）



資料3「音のもと」の提示

(イ) パートごとに表現を工夫し、全体で合唱しながら練り上げる活動

① 各パートの工夫点をパートリーダーが全体に伝え、合唱して試す

各パートのグループ活動で表現の工夫をしたことについて、各パートのリーダーが全体に伝える。このときに、拡大楽譜と「音のもと」を使いながら、練習番号のまとまりごとの「どの部分を」、「どんな理由から」、「どのように」工夫するのかを説明する活動と実際に合唱して試す活動を繰り返し、合唱を練り上げていった。

具体的には、練習番号B-1「たとえば涙に別れること」、B-2「たとえば勇気と知り合うこと」、B-3「たとえば愛を語ること」、B-4「時には孤独と向き合うこと」の部分の強弱を考えた場面では、作曲者の指定する強弱記号と違う提案をしたパートがあり、実際に歌って試したが全員で迷ってしまった。そこで、一度楽譜から離れ、詩から強弱を考えることにした。「愛を語る」のは優しい感じがいいのでは。、「涙に別れる」のは、悲しいときに決心することだから、強

すぎず弱すぎずに歌うといいのでは。」「“孤独と向き合う”には、強い意志が必要だからしっかりと歌ったら。」「“勇気”は弱々しく歌うのはおかしいのでは。」など、生徒たちは詩から強弱の変化の付け方を考え、伝え合った。最終的に、強→弱の順に「孤独」→「勇気」→「愛」→「涙」となり、作曲者の指定する強弱記号と全く同じになったことから、生徒は強弱記号は表現をする上で重要な手掛かりになることを理解し、全員が納得してふさわしい強弱の表現を工夫することができた。併せて、「孤独と向き合うこと」の高音の部分を *ff* で歌い上げたいという要望により、生徒は主体的に発声法を習得することができた。(資料4, 資料5)

- 話し合いをして実際に歌ってみたら、すごく曲の雰囲気に合って強弱がずっとよくなった。これからはどんどん工夫したい。
- 全体のバランスを決めた。テノールは主旋律を追いかける「山びこ」の担当なので、主役のパートをサポートしてこの曲らしさを出したい。



資料4 合唱を練り上げた感想より
(生徒の学習カードより)

資料5「パートリーダーによる説明」

② 「聴き役」が合唱を聴いて意見を伝える

各パートの生徒が交替で「聴き役」になって演奏を聴き合う活動である。「聴き役」になった生徒は、各パートから出た表現の工夫点を中心に聴き、最も曲想にふさわしいと思う表現を選んで、その理由とともに意見や感想を述べた。「聴き役」の指示を基にして意見交換をしたり歌って試したりしながら、さらに合唱を練り上げた。また、「聴き役」を交替し、多くの生徒に考えや思いを伝える機会を設けたことで、より曲想にふさわしい多様な意見を引き出すことができた。(資料6)

- 聴き役で生の合唱を聴いた。この曲の感じを出すためにみんなすごく真剣だった。
- 「バスの音が伸びていない。」と意見を言ったら、バスパートがカンニングブレスの場所を決めてくれて、実際に歌ってみたらすごくよくなってきた。

資料6 「聴き役」になった生徒の感想より

10 授業研究の成果

テクスチュアを窓口にして合唱表現を追求する活動を展開したことによって、生徒は、いろいろな音楽を形づくっている要素は単独に存在するのではなく、相互に関連して音楽が成り立っていることが理解できた。また、テクスチュアを「横の関係」と「縦の関係」に整理し、これらを学習を進める上での共通の思考の道具としたこと(言葉の重視)は、生徒が表現を工夫する活動(体験の充実)を行うために効果的な手立てとなった。

「体験⇔言葉」を双方向にかかわらせた学習を設定したことにより、生徒は、テクスチュアについて知覚・感受したことを基に、楽曲の流れの中で次々に変化していく各声部の役割について考え、主体的に表現を工夫していった。さらに、全体で伝え合ったり歌ったりして合唱を練り上げる活動をしたことにより、生徒は全体の響きの中で各声部の役割を実感を伴って理解でき、楽曲にふさわしい表現で合わせて歌う姿につながった。

中学校第1学年「箏に親しもう」における知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てる鑑賞指導
—唱歌（しょうが）をつくる活動と感じ取って聴いたことを伝え合う活動を取り入れた学習活動の工夫を通して—

1 領域 「B鑑賞」

2 題材名

「箏に親しもう」

3 題材の目標

音色・リズム・速度の関連と曲想とのかかわりを感じ取って聴く力を身に付ける。

4 焦点化する〔共通事項〕

- ・ア 音色, リズム, 速度

5 題材設定の理由

我々の日常生活の中で、我が国の伝統的な音楽に触れる機会は少ない。その少ない機会の中で効率的に鑑賞し生徒の意識の中に我が国の伝統音楽の印象を深く刻むためには、楽曲を鑑賞する上での工夫が必要であると考え。

また、題材の中で取り上げる楽器、楽曲の選択を、題材の目標や内容に照らし合わせて選択する必要があると考え、箏を楽器として選択し、「六段の調」を楽曲として選択とした。その理由は以下の通りである。

- ・箏の音色は、西洋の楽器にはない和楽器独特の優美さと透明感があり、生徒が新鮮な驚きと関心をもって耳を傾けられるものであること。
- ・箏曲「六段の調」は、裏連、引き色など、箏独特の奏法が随所に含まれており、それらは、音色・リズム・速度が関連し合って成り立っていること。また、様々な音色と五線譜上には表記ができない独特のリズムに触れられること。
- ・同じ奏法やリズムでも段ごとの速度の変化によって、音色が変化していくことの関連が感じ取りやすいこと。

また、表1は生徒が箏曲「六段の調」を初めて聴いた感想の記述例であり、予備知識を全く与えずに聴かせて自由に記述させたものである。

生徒の記述内容は、曲想の根拠となる音楽を形づくっている要素とのかかわりはなく、断片的に書かれており、音色・リズム・速度などの関連と曲想とのかかわりについて意識をせずに、情意的に聴いていることがわかる。(表1)

表1 題材学習前の生徒の実態調査

箏曲「六段の調」を聴いた感想	
①要素について書かれた感想より（音色，リズム，速度に関して書かれた感想	
音色	・音がはっきりしている。 ・透き通る音がする。 ・鋭い音。 ・音がまぜこぜになっていなくて，一つ一つの音の区別がつけられる。
リズム	・はねているようだ。 ・リズムがだんだん細かくなっている。
速度	・はじめはゆっくりだけど，最後は速くなった。
②曲想について書かれた感想より	
・日本の曲。 ・ねむくなる。 ・怖い感じ。 ・おもしろくない。 ・時代劇にでてきそうな音楽。 ・ぐによぐによした感じ。 ・昔の中国の音楽のようだ。 ・悲しい感じもするし，うれしい感じもする。	

これらのことから，本題材の指導では，唱歌をつくる活動を通して，音楽を形づくっている要素同士の関連を知覚したことを基に，楽曲を聴いて感じ取ったことについて紹介文を書いたり読んだりして伝え合う活動を通して，要素同士の関連と曲想とのかかわりを感じ取って聴く力を身に付けさせたい。

6 教材

- ・箏曲「六段の調」 八橋 検校 作曲

7 主題に迫る具体の手立て

(1) [共通事項] を生かした活動

- 音楽を形づくっている要素同士を段階を追って関連付ける活動

中学校解説第3章(3) [共通事項] アに「音色，リズム，速度，旋律，テクスチャ，強弱，形式，構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること」と示されている。音楽を形づくっている要素は総合的かつ複雑に絡み合っており，音楽としての全体像をつくり上げている。しかし，全ての要素や要素同士の働きを一度に知覚することは難しい。そこで本題材では，表2に示すように音楽を形づくっている要素を①音色，②リズム，③リズム・速度，④音色・リズム・速度，というように段階を追って要素同士を関連付け，その働きについて知覚できるようにしようと考えた。(表2)

表2 [共通事項] と学習活動(言葉の重視と体験の充実) との関連

	知覚する要素	生徒の主な活動
①	音色	A 箏の特徴的な奏法を取り出して聴き取り，自分なりの言葉を当てはめて表すことを通して，奏法によってどのように音色が変化するかを感じ取る。 感じ取った音色の変化を生かして，どの奏法がどの段に含まれているか聴き取る。

②	リズム	B 「六段の調」に何度も出てくる「コーロリンシャン (注)」というリズムを取り出して聴き取り，自分なりの言葉を当てはめて表すことを通してリズムの特徴を感じ取る。
③	リズム 速度	C 各段の「コーリンシャン (注)」のリズムのみを取り出して聴き取り，段を追うごとに速度が増していくことを感じ取る。
④	音色 リズム 速度	D 同じリズムでも速度が変化していくにつれて，音色も変化していくことを感じ取る。 E 各段の一部分を取り出し，聴き取った音色，リズム，速度を基に唱歌（しょうが）をつくり，楽曲の中でそれらの要素と要素同士の関連がどのようなものかを感じ取る。 F 音色，リズム，速度の関連を意識した上で箏曲「六段の調」全曲を感じ取って聴き，それらの要素がどのように関連して，曲想を生み出しているかを言葉で説明し，伝える紹介文として書く。 G 紹介文を読み合い，互いの感じ取り方で同じところや違うところに気付き，自分にとっての価値を確認する。

(注)：生田流の唱歌（しょうが）。生徒が今回つくったものとは別であり，便宜上このように記載する。

(2) 体験の充実及び言葉の重視

ア 唱歌（しょうが）をつくる活動（体験の充実）

本題材では，箏曲「六段の調」の一部分を取り出し，生徒自身が唱歌をつくる活動を行う。

唱歌とは，雅楽などで用いられる我が国の伝統音楽の伝承方法である。音の高さ，長さ，強弱，音色，速度など，様々な要素の働きを，言葉や声に置き換えて表現し，口伝えに教えることで，楽譜に表すことが難しい繊細な表情や雰囲気までも伝えることができる。そのため現在でも非常に優れた和楽器の指導の手段として受け継がれている。

唱歌をつくるためには，音楽を形づくっている要素を意識して，音や音楽の一刻一刻を聴き取り，それらの働きが生み出す特質や雰囲気をとらえることが重要になってくる。つまり，唱歌をつくる活動の中で，箏の音を自分なりの言葉に表していく過程そのものが，音楽を形づくっている要素同士の関連を知覚する活動であり，思考・判断しながら要素同士の関連が生み出す曲想とのかかわりを感じ取る手立ての一つとなると考える。

本題材の唱歌をつくる活動では，表2の生徒の主な活動で示しているA～Eの活動の中で，音楽を形づくっている要素の音色・リズム・速度の関連を意識しながら，無理なく唱歌づくりに取り組めるようにする。

イ 感じ取って聴いたことを伝え合う活動（言葉の重視）（体験⇔言葉）

感じ取って聴いたことを伝える活動とは，箏曲「六段の調」全曲を感じ取って聴き，

要素同士の関連と曲想がどのようにかかっているかを紹介文として書くこと（表2のF）、その紹介文を読み合い、互いの感じ取り方の同じところや違うところに気付く中で、箏曲「六段の調」が自分にとってどんな価値があるのかを思考・判断しながら確認していくこと（表2のG）である。

前述したように、唱歌をつくる活動そのものが、要素同士の関連を知覚する活動であり、生徒が音色の違い、特徴的なリズム、速度の変化と、これらの要素同士の関連を主体的に感じ取って聴くことができると考える。

そこで、この唱歌をつくる活動の後に、要素同士の関連を意識して全曲を鑑賞することで、音色・リズム・速度の関連がどのような曲想と結び付いているかについて、実感を伴って理解させていきたい。さらに、箏曲「六段の調」を紹介する文を書き、互いに紹介文を読み合う活動を通して、聴き味わいを一層豊かにしていきたいと考える。各自が、曲想の根拠となる要素同士の関連を理由としてあげながら、箏曲「六段の調」のよさや美しさについて書いた紹介文を互いに読むことによって、自己の思考・判断するための視野を広げていきたい。

8 授業の実践

(1) 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	エ 鑑賞の能力
歌唱			
器楽			
創作			
鑑賞	○	○	○
題材の評価規準	箏曲「六段の調」の音色・リズム・速度に関心を持ち、意欲的に要素同士の関連を聴き取ろうとしている。	音色・リズム・速度の関連を知覚し、曲想とのかかわりを感じ取っている。	音色・リズム・速度の関連と、それらが生み出す曲想とのかかわりを感じ取って聴いている。
学習活動における具体的評価規準	①音色・リズム・速度に関心を持ち、それらの関連と曲想とのかかわりを聴き取るために、唱歌（しょうが）をつくることに意欲的である。 ②音色・リズム・速度の関連と曲想とのかかわりに関心を持ち、紹介文を書いたり、読み合ったりすることに意欲的である。	①音色・リズム・速度の関連を知覚している。 ②自分なりの唱歌（しょうが）をつくりながら、音色・リズム・速度の関連と曲想とのかかわりを感じ取っている。	①楽曲全体を聴き、音色・リズム・速度の関連と曲想とのかかわりについてを自分なりの言葉で紹介文を書いて、箏曲「六段の調」のよさや美しさを味わっている。 ②紹介文を読み合い、互いの気付きを自分の聴き味わいに生かして聴いている。

(2) 学習と評価の計画（4時間扱い）（GT：ゲストティーチャー）

次	ねらい	主な学習活動	具体的評価規準
第1次 (1)	【知覚・感受】 ○箏曲「六段の調」の箏の音色、特徴的なリズム、速度の変化とその関連を聴き取る。	○箏曲「六段の調」に含まれる様々な奏法をGTから学ぶ。（一斉） ○奏法による音色の違い、リズム、速度の変化を聴き取り、言葉に表す。（個別） ○どの段にどの奏法が含まれるのか	アー① イー①

		GTの演奏から聴き取る。(個別) ○曲中に何度も表れる特徴的なリズム「コーロリンシャン」を連続して聴き、同じリズムでも速度が変化するとどのように音色が変化するか聴き取る。(一斉)	
第2次 (2)	【思考・判断】 ○箏曲「六段の調」の音色・リズム・速度の働きを知覚し、それらを自分なりの言葉で唱歌(しょうが)で表すことで、要素同士の関連と曲想のかかわりを感じ取る。(体験の充実)	○唱歌(しょうが)とは何かを知る。(個別) ○GTの歌う唱歌を参考にして、唱歌をつくる。(個別) ○つくった唱歌を互いに読み合う。(一斉) ○同じ奏法、リズムでも速度の違いによって唱歌として当てはめる言葉が変化することを確認する。(一斉)	イー②
第3次 (1)	○楽曲全体を聴き、紹介文を書くことを通して要素の働きと曲想とのかかわりを感じ取って聴く。 ○紹介文を読み合うことを通して、互いの意図や思いに共感し、自分の聴き味わいに生かす。(体験↔言葉)	○楽曲全体を鑑賞し、音色・リズム・速度の働きと曲想とのかかわりを、自分なりの言葉で説明する紹介文を書く。(個別) ○紹介文を読み合う。(グループ) ○まとめとして全曲を鑑賞する。(個別)	アー② エー① エー②

9 授業の分析と考察

(1) 〔共通事項〕を生かした活動

- 音楽を形づくっている要素同士を段階を追って関連付ける活動

音楽を形づくっている要素は総合的かつ複雑に絡み合っていて働き、音楽としての全体像をつくり上げている。しかし、全ての要素や要素同士の働きを一度に知覚することは難しい。そこで、箏曲「六段の調」においては、①音色、②リズム、③リズム・速度、④音色・リズム・速度、と段階を追って要素同士を関連付け、その働きについて知覚できるようにした。具体的には②リズム、③リズム・速度、④音色・リズム・速度の段階において、次のような活動を行った。

I 特徴的なリズム(「コーロリンシャン」)を聴き取り、言葉に表す活動

この活動では、箏曲「六段の調」に何度も出てくる特徴的なリズム(「コーロリンシャン」)をゲストティーチャー(以下、GTと示す。)の演奏を聴き取って言葉に表した。生田流の唱歌(しょうが)で「コーロリンシャン」と表すリズムであるとは伝えずに聴き取らせたため、生徒は資料1のように様々な言葉で表現した。この活動を通し、生徒はリズムが言葉に置き変えて表現できるものであり、唱歌が非常に優れた伝承方法であることを理解した。併せて、同じリズムを聴いても人によって聴き取り方が違うことにも気付くことができた。(資料1)

・じゃーん りん しゃん	・トーン トン トン
・たんっら らん じゃらん	・パーンタ トゥ パドゥ

資料1 特徴的なリズム「コーロリンシャン」を聴き取り、言葉に表した例

II 特徴的なリズム（「コーロリンシャン」）が、段を追うごとに速度が増していくことを聴き取る活動

この活動では、箏曲「六段の調」の演奏CDから特徴的なリズム（「コーロリンシャン」）のみを取り出してつなぎ合わせ、同じリズムが段が進むにつれて速度が増していくことを聴き取った。「コーロリンシャン」のリズムをつなぎ合わせ、連続して聴くことによって、より明確に生徒が速度の変化を意識することができた。

III 特徴的なリズム（「コーロリンシャン」）が速度の変化に伴って音色も変化していくことを聴き取り、言葉に表す活動

IIで聴き取った速度が変化していくリズムを言葉に表した。表3は聴き取った生徒の一例である。聴き取ったリズムが同じものであっても、速度が変化していくことによって、言葉も変化した。すなわち音色の変化にも気づき、要素同士の関連を知覚することができた。（表3）

表3 特徴的なリズム「コーロリンシャン」の速度の変化に伴う音色の変化の一例
（上から下に演奏の速度が速くなっていく）

速度が遅い	初段「ランタ ターン ジャーン」 「ドゥンド ドウン ドウオン」	音 色 速 度 リ ズ ム の 関 連 ↓
	三段「トント レーン トトーン」 「コーロ ソン ジャン」	
速度が速い	六段「パーラ ラ ラン」 「チャンラ ラー ラン」	

(2) 言葉の重視と体験の充実

ア 唱歌をつくる活動について（体験の充実）

(ア) 箏独特の奏法の音色を聴き取り、自分なりの言葉を当てはめて表す活動

この活動では、GTに「かき爪」「裏連」等を演奏してもらい、聴き取った音色を表4のように言葉に表した。生徒たちは、意欲的にこの活動に取り組み、ほぼ全員が音色を言葉に表すことができた。中には、文字の大きさに音の強弱を表したり矢印や波線で音程の上下を表したりした生徒もいた。このように聴き取ったことを言葉に表現することを通して、音色にはどのような働きがあるかを自然に気付くことができるようになったと考える。（表4、資料2）



資料2「GTの箏の音色を聴く」

表4 箏独特の奏法の音色を聴き取り言葉に表した例

奏法名	弾き方の特徴	生徒が聴き取った例
かき爪	隣り合った弦を素早く握り込むように弾く	ボーン、ジャー
輪連	爪を左横にスライドさせてひっかくように弾く	スサー、シャー
裏連	爪の裏側を使い下降するグリッサンドのように弾く	カチャカチャポロポロ
後押し	弦を弾いた後、左手でその弦を押し、音高を高く変化させる	ピーンニョイ → ン
引き色	弦を弾いた後左手で弦を緩め、音高を低く変化させる	ウーヴ〜ヴ〜ヴ〜ヴ〜

(イ) 各段の一部分を取り出して自分なりの唱歌（しょうが）をつくる活動

前述Ⅰ～Ⅲまでの活動をもとに、自分なりの言葉を用いて唱歌をつくる活動を行った。何度もCDやGTの演奏に耳を傾け、音の一つ一つやリズム、速度の違いなどを聴き取り、それらを唱歌で表した。唱歌をつくった後の生徒の感想を資料2に示したが、漠然と楽曲を聴くのではなく、音色、リズム、速度の関連に焦点化して聴くことができていた。「同じリズムなのに、速度が速くなると音色もちがって聴こえて、雰囲気も変わるのには不思議だし、面白い。だから、唱歌の言葉を変えてみた。」というように、自らの感性を研ぎ澄ませて思考・判断しながら唱歌で表す主体的な聴き方に変容していることがわかる。（資料2、資料3）

- ・今まであまり聴かないような独特なリズムを唱歌にするのに、何度も聴きながら考えた。「六段の調」のリズムは面白い。
- ・同じリズムなのに、速度が速くなると音色もちがって聴こえて、雰囲気も変わるのには不思議だし、面白いと思った。だから私は、唱歌の言葉を変えてみました。
- ・本物の箏の音は、CDと全然違って感動した。生演奏だと、音の変化とGTの先生が箏を演奏する体の動きや、音と音との間（ま）もよくわかって唱歌にしやすかった。

資料2 唱歌づくりを行った後の生徒の感想より



資料3 「生田流の楽譜に唱歌を書き入れる」

イ 感じ取って聴いたことを伝え合う活動について（言葉の重視）（体験⇔言葉）

(ア) 紹介文を書く活動

唱歌をつくる活動の後、箏曲「六段の調」全曲を鑑賞し紹介文を書く活動を行った。音色、リズム、速度の関連によって生み出される曲想について感じ取って聴いたことを、自分にとってどんな価値があるのかを伝える文章にすることとした。具体的には、「あなたが感じ取って聴いた箏曲『六段の調』のよいところを紹介する文章を書きましょう。」とし、この楽曲がもつ価値を自分なりに解釈しながら、音楽のよさや美しさを味わう力を紹介文から見取った。資料4は生徒の書いた紹介文である。要素同士の間や要素の働きと曲想とのかかわりに気付き、それらを結び付けて感じ取り、自分なりの価値をもって聴いていたことがわかる。（資料4）

資料4-① 生徒の紹介文より（ =自分なりの価値）

この曲は「六段の調」という曲です。最初はゆっくりした速さで、箏の音色がとても響いて聴こえます。そのうちに速さが速くなり、「ンジャジャン〜」というリズムが多くなって、強い勢いで雨が降っているようなイメージになります。

この曲では「コーロリンシャン」というリズムが多く出てきますが、速さが変わることで、「ポオポオソソウソウ」（高い音で速さが速い）と聴こえたり、「ドウンドウンドオウソウ」（低い音で速さが遅い）と聴こえたりしてとてもおもしろいです。

輪連「ンシャンッとラッシュッッが同時に聞こえる」という奏法があるのですが、これは音色が響くというよりは、あえてにごらせた音色にしています。「六段の調」では、不意打ちのように、まだ前の

音が響いている間に（例えば「ポロロン」）この輪連が入ってきてあつと驚かされるはずで

す。箏の音色そのものは、心に直接届いて、溶けるような清らかな音です。「六段の調」では、さらにリズムや速さを変えることでその音色が変化し、表情豊かに情景を表しています。私は、自然の中で暗いところに葉と葉の間から光が入ってくるような光景や、小川のせせらぎというような情景をイメージすることができました。この曲の魅力はここにあると思います。ぜひ皆さんも聴いてみてください。

資料4-② 生徒の紹介文より（ =自分なりの価値）

この曲は、今から300年以上も前に、京都の八橋検校という人がつくりました。

この曲は、最初は一つ一つの音がしっかりと聴こえてくるようなじんわりとした音の感じから、速く音が流れていく軽やかな音の感じに移り変わっていくことが一つの特徴となっています。この曲の最初のじんわりした重々しい感じと軽やかに流れていく音色の違いは、速さが関係しています。じんわりした重々しい感じは速さが遅いのに対して、軽やかな感じの方は速さが速いのです。また、リズムも速度が速くなるとはねているように聴こえたり、焦っているように聴こえたりします。さらに、それに伴って音色も変わってきます。

つまり、音色、リズム、速さは別々のものではなくて、関係していて曲の表情や雰囲気をつくったり変えたりするものなのです。

多分、初めて「六段の調」を聴く人は、すぐに、だんだん速度が速くなることに気が付くでしょう。音色とリズムも一緒に聴いて曲の表情や雰囲気が変わって行くことにも気が付ければとてもおもしろく聴けると思います。箏の音はとても味わい深いので、みなさんもぜひこのような聴き方にチャレンジしてみてください。

(イ) 紹介文を読み合う活動

互いに書いた紹介文を読み合った後、感じたことを自由に書く活動を行った。資料5は生徒の感想の一部であるが、互いの思いや意図を知り、自分が感じ取った以外の様々な感じ取り方があることに気付き、自己の聴き味わいをさらに広げていっている様子が見える。（資料5）

- ・曲のとらえ方が「昔にタイムスリップした」とか僕とは違うとらえ方をしていた。
- ・わたしと同じようなことを書いている人も、書き方や表し方が違ったりして面白い。
- ・授業で聴いたらこの曲のよいところに気が付いて、箏という楽器が好きになった。
- ・「かき爪『ジャーン』は暗い感じになる」というのは全然思いつかなかった。私は引き締まった感じだと思っていたので、人それぞれ感じることは色々だと思った。

資料5 生徒の感想文より

10 授業研究の成果

唱歌をつくる活動と感じ取って聴いたことを伝え合う活動を取り入れ、学習活動を工夫したところ、生徒の紹介文などから次のことが明らかになった。

- 唱歌をつくる活動を通して、音色・リズム・速度の関連を知覚し、要素同士の関連が生み出す曲想とのかかわりを感じ取ることができるようになった。さらに、この体験を基に楽曲全体を聴き、箏曲「六段の調」のよさや美しさを味わうことができた。
- 感じ取って聴いたことを伝え合う活動を通して、自分なりの価値をもって要素の関連と曲想とのかかわりを結び付けた紹介文を書くことができるようになり、さらに紹介文を読み合うことで互いの思いや意図に共感でき、自己の聴き味わいが広がった。

3 研究のまとめ

本研究では、知覚・感受したことを基に思考・判断する力を育てるための手立てを講じ、授業研究を行った結果、以下のような児童生徒の姿が期待できることがわかった。

(1) 〔共通事項〕を生かした活動について

〈小学校「A表現 音楽づくり」〉

- 既習曲と「音楽グラフ」を用いて要素や仕組みを知覚し、曲想を感受する活動
- 思考・判断する基になる知識を習得する活動

「旋律、音色、速度」と、「反復、変化」を既習曲や音楽グラフを用いて知覚・感受し、曲想の変化を試した上で既習曲にふさわしい要素を選んだことは、自分が思い描いたイメージを音楽で表すための「児童に役立つ知識」を身に付けることにつながった。

〈中学校「A表現 歌唱」〉

- テクスチャという視点で音楽を形づくっている要素を「横の関係」と「縦の関係」に整理した提示

音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号など（「音のもと」）をカードにして、拡大楽譜と合わせて授業で扱ったことで、要素同士の関連を知覚し、曲想を感じ取って思考・判断するための手段が明確となった。

〈中学校「B鑑賞」〉

- 音楽を形づくっている要素同士を段階を追って関連付ける活動

特徴的なリズムと速度の変化は、音色にもかかわることを知覚する活動を通して、生徒が要素同士は相互に関連して音楽が成り立つことに気付き、音楽のよさを感じ取ることができるようになった。

(2) 言葉の重視と体験の充実について

ア 体験の充実

〈小学校「A表現 音楽づくり」〉

- コンピュータを活用した活動

音楽を形づくっている要素を扱いながらイメージに合う音楽をつくったことで、一人一人が思考・判断しながら音を音楽に構成していく過程を実感を伴って理解することができた。

〈中学校「A表現 歌唱」〉

- テクスチャを窓口にして表現を工夫する活動

「横の関係」と「縦の関係」のまとまりを示す練習番号を活用し、「横の関係」と「縦の関係」を意識したグループ活動をしたことは、生徒自身が思考・判断しながら課題に取り組む姿につながった。

〈中学校「B鑑賞」〉

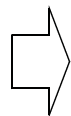
- 唱歌をつくる活動

箏独特の奏法の音色を聴き取り、自分なりの言葉を当てはめて表したり、各段の一部分を取り出して自分なりの唱歌をつくったりしたことは、要素同士の関連を知覚し、曲想とのかかわりを感じ取るための効果的な手立てとなった。

イ 言葉の重視，体験↔言葉

〈小学校「A表現 音楽づくり」〉

○互いの作品のよさや面白さを伝え合う活動



「イメージ計画書の作成」「音楽の材料表の提示」「作品鑑賞会の設定」を実施したことにより，どの児童も本題材の目標である「思いや意図をもって音楽をつくる」とともに，自分なりの言葉で伝え合うことができた。

〈中学校「A表現 歌唱」〉

○表現の工夫をしたことを伝え合う活動



生徒の言葉を生かした「音のもと」を活用し，パートごとに表現を工夫し全体で合唱しながら練り上げたことは，本題材の目標である「全体の響きの中で各声部の役割を理解し，表現を工夫しながら合わせて歌う」姿により近付いた。

〈中学校「B鑑賞」〉

○感じ取って聴いたことを伝え合う活動



紹介文を書いたり読み合ったりしたことは，その音楽が自分にとってどんな価値があるのかを確認でき，本題材の目標である「要素同士の関連と曲想とのかかわりを感じ取って聴く」ことにつながった。

さらに，その後の学習に応用・転移できる力を身に付けさせる指導の改善・充実について究明していきたい。

〈引用文献〉

文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」平成20年8月

文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」平成20年9月

高須 一 「音楽科における言葉の重視と体験の充実」初等教育資料（東洋館出版社）平成19年8月

関係者一覧

1 研究協力員

筑西市立嘉田生崎小学校	教諭	新井 弥生
ひたちなか市立勝田第一中学校	教諭	尾花 淳
かすみがうら市立千代田中学校	教諭	能城 哲

2 茨城県教育研修センター

所長	中村 一夫
教科教育課 課長	小沼 光一
同 指導主事	寺田 純子